

「NP1 ヲ NP2 ト V」型の名詞句解釈と副詞共起制限

金 賢娥

キーワード：引用構文、認識動詞構文、「ダ」、「ト」、コピュラ文

1. はじめに

現代日本語には形態・意味的に類似した次のような三つの構文が存在する。

- (1)a.先生は太郎が天才だと思っている。
- b.先生は太郎を天才だと思っている。
- c.先生は太郎を天才と思っている。

(1)は主に認識動詞が生じた文で現れる現象であるため、仁田(1980)などで「認識動詞構文」と呼ばれている。従来の研究は、本来(1a)のような形で現れるはずの文が(1b)のような形で現れる現象の原因を明らかにするためのものがほとんどであった。そのため、(1c)のような構文はほとんど注目されず、(1b)と同類のものとして扱われるか、または、(1b)から派生された構文だと見なされる場合が多かった。そこで、本稿では(1c)のような構文に注目し、「NP1 ヲ NP2 ト V¹」型は「NP1 ヲ NP2 ダト V」型から「ダ」が省略、または脱落した構文ではなく、本来「ダ」が存在しない構文であることを主張する。

2. 先行研究

「NP1 ヲ NP2 ダト V」型と「NP1 ヲ NP2 ト V」型の相違に注目した研究としては、森山(1988)、阿部(2001、2004)などがある。森山(1988)は「A は B ダト 思う」と「A ヲ B ダト 思う」、「A ヲ B ト 思う」の三つの形式について、後二者は前者から「引用の格成分が、引用成分の中から抽出される場合」とし、このような現象を「引用成分の繰り出し」と呼んでいる。さらに、森山(1988)は「A ヲ B ト 思う」型を「同定型」と称し、「A は B ダト 思う」型と区別している。しかし、森山(1988)は「引用の繰り出し型」を「引用型」と「同定型」の中間的な存在として考えており、この構文に生起する「ト」においても「引用」といふべきか「同定」といふべきか曖昧であると述べている。

¹ 本稿は、考察対象を名詞に限定するため、以下では「NP1 ヲ NP2(ダ)と V」と表記することにする。ただし、先行研究では「A ヲ B ト 思う」という表記をしているため、先行研究を用いる場合は「A ヲ B ト 思う」のまま表記する。

【表 1】引用成分の繰り出し(森山(1988:80))

Xガ「AハBダ」ト思ウ	引用型
XガAヲ「Bダ」ト思ウ	引用の繰り出し型
XガAヲBト思ウ	同定型

しかし、森山(1988)の「同定」は、単にコピュラ文のようにAとBが「A=B」の関係にあることを意味しているのか、それともまた別の意味で用いられているのかがはっきりしていない。もし「A=B」の意味関係を「同定」と言うならば、上記の三つのタイプのAとBは全て結果的に「A=B」の意味関係にあり、「XガAヲBト思ウ」型のみが「同定」の意味を表わしているとは言えない。このように、森山(1988)の「同定型」は、具体的にどのようなものを表わしているのかという点では説明が不足しており、突き詰めて検討する必要があると思われる。

「AヲBト思ウ」と「AヲBダト思ウ」の異なる振る舞いについて論じた研究としては、阿部(2001、2004)がある。阿部(2001、2004)は、「AヲBト思ウ」が「AヲBダト思ウ」から「ダ」が省略された構文だとする先行研究の主張に異論を唱えている。

阿部(2001、2004)によると、省略した文中要素はいつでも復元可能であるから、「AヲBダト思ウ」に対する何らかの操作は「AヲBト思ウ」にも等しく適用できるはずだが、例(2)、(3)のようにそれができないため、両構文は等しいものではないと述べている。

- (2)a. (みんなは) これを吉報だと思った。
- b. (みんなは) これが吉報だと思った。
- (3)a. (みんなは) これを吉報と思った。
- b.* (みんなは) これが吉報と思った。

上記の(2a)の「これを吉報だと思った」は、(2b)の「これが吉報だと思った」のように「ヲ」を「ガ」に置き換えることが可能であるが、(3a)の「これを吉報と思った」の場合、(3b)のように「ヲ」を「ガ」に置き換えることができない。つまり、(2b)に可能な操作が(3b)には適用できないことから、(3a)が(2a)から「ダ」が省略された構文だとする議論は妥当ではないということである。

しかし、上記の現象で「AヲBト思ウ」が「AヲBダト思ウ」から「ダ」が省略されたものではないということが言えるとしても、「AヲBト思ウ」が「AヲBダト思ウ」から「ダ」が脱落した構文である可能性がまだ残っている。つまり、上記の阿部(2001)の議論は、「ダの脱落」の可能性までを否定するものではないことである。

- (4)a. 皆にはこれが吉報らしい。
- b.*皆にはこれが吉報だらしい。

上記の(4)では、「吉報」が述語として働く²ため「ダ」が必要であるはずだが、「らしい」のようなモダリティ形式が生起する場合、「ダ」は義務的に脱落する。このような現象に照らし合わせて考えると、「AヲBト思う」構文においても「ト思う」の前で「ダ」が脱落している可能性がある。すなわち、「AヲBト思う」は「AヲBダト思う」から「ダ」が省略されたものではないという阿部(2004)の主張に間違いはないが、その議論がもう一つの可能性(「ダ」の脱落)を否定するものにはならないということである。

森山(1988)及び、阿部(2001, 2004)は、それぞれの構文に現れたAとBがコピュラ的解釈であるという点で共通している。しかし、実際、コピュラ的解釈が可能であっても「NP1ヲNP2トV」の場合、名詞句の解釈に制約が見られる場合がある。

- (5)a. 先生は犯人を太郎だと思っている³。
b. ??先生は犯人を太郎と思っている。

(5)は「A=B」というコピュラの関係であっても、「先生が犯人を捜してそれが太郎だと思っている」のような一般的な解釈だと(5a)は自然だが、(5b)はやや許容度が落ちるように思える。しかし、(5b)の場合も、「先生がすでに犯人を特定していて、それが太郎と同一人物である」という解釈は可能である。このような現象は「ダ」の有無が名詞句の解釈制約に関連している可能性を示唆する。この点については5節で詳しく述べる。

本稿では、前者のような解釈を「役割—値」、後者のような解釈を「値—値」と呼ぶことにする⁴。本稿では、一つの事物に特定されないものを「役割」、特定される指示的なものを「値」という性質を持つと考える。つまり、本稿での「役割—値」解釈とは、「Aという役割に値するBを特定する」ということであり、「値—値」解釈とは、「話者がすでに特定し

² NP2である「吉報」が述語として働いていることは、「である」や過去形「だった」が現れることから確認できる。

例：みんなにはこれが吉報であるらしい皆にはこれが吉報だったらしい。

³ 阿部(2004:98)は「犯人は太郎だ」のような倒置指定文は「AヲBダトV」に対応させようとすると若干不自然であり、同じ倒置指定文を「AヲBトV」に対応させると、「AヲBダトV」の場合よりもさらに不自然な表現になると述べている。

- (i) ?探偵は犯人を太郎だと思っているらしい。
(ii) ??探偵は犯人を太郎と思っているらしい。

しかし、筆者が(i)の例に対する日本語話者の内省を調べたところ、完全に自然とはいえないが(?)を付けるほどではないという意見が多かったため、本稿では(i)を、後述の「役割—値」の解釈が可能であると考える。たとえ(1)の文の内省判断が阿部(2004)と異なるとしても、(1)と(2)の許容度に差があることは阿部(2004)と一致しているので、議論に問題はないと考えている。また、(ii)の判定は「倒置指定文」の解釈の場合を想定した判定であるため「(?)」が筆者の考えでは「値—値」として読まれる場合は(ii)も成立すると思われる。

⁴ 本稿での「役割」と「値」という用語は、メンタル・スペース理論での概念と完全に一致するものではない。

ている A という値と、もう一つの値 B を同一化する」ということである。A がすでに特定されているという点で、「役割—値」解釈と「値—値」解釈の違いが出てくる。

最後に、今までこの種の議論は主に「思う」を中心に論じられてきたが、その他の引用動詞までを視野に入れると「思う」の場合とは異なる振る舞いを見せるものが数多く存在することに気づく⁵。「NP1 ヲ NP2 ト V」型の特性を明らかにするためには、「思う」だけではなくその他の引用動詞にまで視野を広げ、その振る舞いを精密に検討する必要がある。そうすることにより、ある種の動詞が「NP1 ヲ NP2 ト V」型に生じた場合に見られる相違が持つ意味が明らかになり、「NP1 ヲ NP2 ト V」型を正しく位置づけることが可能になると思われる。

3. 名詞句の意味解釈

今田(2009)は名詞述語文を分析するに当たって、名詞句単独の意味の理論で記述すべき問題と文全体の意味論的・機能論的構造の問題を区別して考える必要があると述べている。

- (6)a. スミスを殺した犯人は正気じゃない。
- b. スミスを殺した犯人はジョーンズだ。

今田(2009)は(6)の例に対し、(6a)は西山(2003)の「指定文」の解釈が可能で、(6b)は「倒置指定文、倒置同一性文、第二タイプの指定文」といった多様な解釈が可能であり、複数の要素が複雑に絡んでいるが、これをいくつかの理論に分けて考えるとより簡単に説明されるとしている。すなわち、名詞句の意味論の理論を用いると、(6a)の主語と述語は対象と属性の関係にあり、(6b)は役割と値(主語が役割の場合)、もしくは同一物(主語が値の場合)の関係にあることが説明される。なお、(6b)の倒置同一性文の読みと第二タイプの指定文の読みは文の焦点の違い⁶という機能論的構造の理論で説明されることであると述べている。以下に、今田(2009:59)の表を示す。

【表 2】 「スミスを殺した犯人は正気じゃない/ジョーンズだ」

⁵ 金(2011)は「A ヲ B ダト V」型に生じた場合「思う」と異なる振る舞いを見せる「予想する、推測する、決める、みなす」のような動詞について指摘している。詳しくは 5 節で紹介する。

⁶ 今田(2009)は、指定文や倒置同一性文の述語は通常の焦点であるのに対し、倒置指定文や第二タイプの指定文の述語は選択的焦点になっているとしている。

類型	主語名詞句	述語名詞句 ⁷	意味論的構造	機能論的構造
措定文(属性的)	<i>r</i> (役割)	<i>insane'</i>	対象と属性	通常の焦点
指定文(指示的)	<i>a</i> (値)			
倒置指定文	<i>r</i>	<i>j</i>	役割と値	選択的焦点
倒置同一性文	<i>a</i>		同一物	通常の焦点
第二タイプの指定文				選択的焦点

本稿では文全体の意味や機能論的な面には注目せず、主語名詞句と述語名詞句がそれぞれ「役割」と「値」のどのようなものを指すかという観点から記述することにする。

4. 「NP1ヲNP2トV」型と「NP1ヲNP2ダトV」型をとる動詞

本稿では「NP1ヲNP2トV」のNP1とNP2にそれぞれ与えられる解釈を記述することにより、最終的には「NP1ヲNP2トV」の性質を明らかにすることを目指す。

以下に、小泉(他)(編)(2004)に挙げられている日本語基本動詞の中で「NP1ヲNP2ダトV」、または「NP1ヲNP2トV」型をとる動詞を示す。

【表3】動詞リスト

呼ぶ、叫ぶ、読む、発音する、書く、記す、記録する、表現する、翻訳する、聞く、言う、答える、教える、主張する、紹介する、伝える、報告する、疑う、思う、考える、解釈する、判断する、理解する、見る、認める、信じる、予想する、想像する、感じる、誤解する、感心する、決める、決定する、定める、改める、改正する、訂正する、限る、諦める、慌てる、安心する、怒る、恐れる、驚く、悲しむ、がっかりする、嫌う、苦しむ、楽しむ、泣く、悩む、憎む、喜ぶ、笑う

以下では、上記の動詞をさらに「NP1ヲNP2ダトV」型のみを取る動詞、「NP1ヲNP2トV」型のみを取る動詞、そしてこの二つのタイプを両方取れる動詞の3グループに分類する。

(i) 「NP1ヲNP2ダトV」型のみを取る動詞

諦める、慌てる、安心する、怒る、恐れる、驚く、悲しむ、がっかりする、嫌う、苦しむ、楽しむ、泣く、悩む、憎む、喜ぶ、笑う

(ii) 「NP1ヲNP2ダトV」、「NP1ヲNP2トV」を両方取れる動詞

聞く、言う、答える、教える、主張する、紹介する、伝える、報告する、思う、考える、解釈する、判断する、理解する、見る、認める、信じる、予想する、想像する、感じる、誤解する

(iii) 「NP1ヲNP2トV」型のみを取る動詞

⁷ 以下の"*insane'*"は「正気じゃない」を、"*j*"は「ジョーンズ」を表わす。

呼ぶ、叫ぶ、読む、発音する、書く、記す、記録する、翻訳する、表現する、決める、決定する、定める、改める、改正する、訂正する、する、限る

上記の動詞類の中でも「ダ」の生起が必須的な(i)タイプと「ダ」が生起しない(iii)タイプは、金(2011)で指摘⁸しているように、一方の構文しかとらないため、現象の差が比較的はつきりしている。しかし、(ii)タイプの動詞においては、「ダト」と「ト」を両方取れるため、表面的に両構文の意味の差や文法的違いがはっきり見えない。そのため、本稿では(ii)タイプの動詞が生起した構文に注目し、一見、意味や形態の面で類似しているように見える両構文の差について論じたい。

5. 「NP1ヲNP2トV」型の名詞句制約

本節では「NP1ヲNP2ダトV」型と「NP1ヲNP2トV」型を両方取る(ii)タイプの動詞類が生起した文の名詞句の解釈の制約について論じる。

前節で示した(ii)タイプの動詞は、基本的に「NP1ヲNP2ダトV」型と「NP1ヲNP2トV」型の両方に生起する。しかし、(ii)タイプの動詞が常に両構文に生起可能だとは言いがたく、構文タイプによって名詞句の解釈が制限される場合が存在する。

5.1 「NP1ヲNP2トV」型に見られる名詞句の解釈制限

以下の例文の「NP1ヲNP2ダトV」型の名詞句は、「役割一値」として自然に解釈されるが、「NP1ヲNP2トV」型の名詞句は「役割一値」の解釈だと許容度が少々落ちる。

(7) 聞く：

- a. 先生は責任者を太郎だと聞いたようだ。
- b.??先生は責任者を太郎と聞いたようだ。

(8) 言う：

- a. 先生は責任者を太郎だと言っている。
- b.??先生は責任者を太郎と言っている。

(9) 答える/伝える/報告する：

- a. 先生は責任者を太郎だと答えた/伝えた/報告した。
- b.??先生は責任者を太郎と答えた/伝えた/報告した。

(10) 紹介する/教える/主張する：

- a. 先生は責任者を太郎だと紹介した/教えた/主張した。

⁸ 金(2011)では、動詞の種類を人間の精神活動を表わす動詞に限っているが、感情動詞は「NP1をNP2ダトV」型のみをとり、思考・判断動詞の一部は「NP1をNP2トV」型のみをとるものが存在すると指摘し、これらの現象は「NP1をNP2ダトV」型と「NP1をNP2トV」型が派生関係ではないという裏づけになると論じた。

b.??先生は責任者を太郎と紹介した/教えた/主張した。

(11) 思う/考える/みる/信じる/想像する/感じる/誤解する/予想する/判断する/認める：

a. 先生は責任者ヲ太郎だと思っている/考えている/みている/信じている/想像している/
感じている/誤解している/予想している/判断した/認めた。

b.??先生は責任者ヲ太郎と思っている/考えている/みている/信じている/想像している/感
じている/誤解している/予想している/判断した/認めた。

(12) 解釈する/理解する：

a. 先生は神を太陽だと解釈している/理解している。

b.??先生は神を太陽と解釈している/理解している。

(7a)~(12a)の例で見られるように、「NP1ヲNP2ダトV」型の名詞句は「役割一値」の
関係としては自然に解釈されるが、(7b)~(12b)の「NP1ヲNP2トV」型の場合には、「役
割一値」の解釈だと、前者に比べ許容度が落ちる傾向がある。しかし、(7b)~(12b)の文も、
すでに話者がNP1を特定していて、それと1対1に対応している値がNP2に表示される
意味的な等価な関係にある「値一値」の解釈を想定すると自然に解釈が可能になる。

また、次のように、(7)~(12)の例文で役割として解釈されやすかったNP1を、NP2と同
じカテゴリに属する「値」として解釈される名詞に変えると許容度が上がる現象が存在す
る。

(13) 先生は次郎を太郎と聞いたようだ。

(14) 先生は次郎を太郎と言っている。

(15) 先生は次郎を太郎と答えた/伝えた/報告した。

(16) 先生は次郎を太郎と紹介した/教えた/主張した。

(17) 先生はAppleを青りんごとと思っている/考えている/みている/信じている/想像して
いる/感じている/誤解している/予想している/判断した/認めた。

(18) 先生はAppleを青りんごと解釈している/理解している。

このような現象から、「NP1ヲNP2トV」型には、名詞句の解釈に制限が見られること
がわかる。すなわち、「NP1ヲNP2トV」型のNP1は「役割」としての名詞句は許さず、
「値」としての名詞句を要求すると考えられる。「NP1ヲNP2トV」型にこのような解釈
の制約が見られる原因を明らかにするためには更なる考察が必要だが、おそらくこのタイ
プのNP2がコンピュータ関係を成立させる名詞述語として働かないためではないかと思われる。
つまり、「NP1ヲNP2ダトV」型のNP2はNP1の述語として働いているため、名詞述語
文に現れる多様な解釈が可能だが、「NP1ヲNP2トV」型のNP2はNP1の述語として働
いていないため、名詞述語文のような多様な解釈が制限され、「値一値」のようにNP1と

NP2を単純に結び付ける解釈がされるのだと思われる⁹。

次節では「NP1ヲNP2ダトV」型に制限される名詞句の解釈の問題について論じる。

5.2 「NP1ヲNP2ダトV」型に見られる名詞句の解釈制限

(22)～(24)の例を見ると、今までの現象とは逆に、「NP1ヲNP2ダトV」型を取る場合、文の許容度が落ちる現象が存在する。

- (19) a. 先生は責任者を太郎だと聞いたようだ。
b. ??先生は責任者を太郎と聞いたようだ。
- (20) a. 先生は責任者を太郎だと言っている。
b. ??先生は責任者を太郎と言っている。
- (21) a. 先生は責任者を太郎だと答えた/伝えた/報告した。
b. ??先生は責任者を太郎と答えた/伝えた/報告した。 (再掲)
- (22) a. *太郎はアップルをエップルだと聞いた。
b. 太郎はアップルをエップルと聞いた。
- (23) a. ?太郎はアップルをエップルだと言った。
b. 太郎はアップルをエップルと言った。
- (24) a. ??太郎はアップルをエップルだと答えた/伝えた/報告した。
b. 太郎はアップルをエップルと答えた/伝えた/報告した。

(22)～(24)のNP1とNP2は「値」としてしか解釈されないような例である。同じ動詞であっても、(22a)～(24a)は(19a)～(21a)の現象とは異なり、「NP1ヲNP2トV」型の場合、「値—値」として自然に解釈されるが、(22b)～(24b)のように「NP1ヲNP2ダトV」型にすると、許容度が落ちるといふ、(19)～(21)とは対照的な現象が見られる。このような差が見られる原因は、名詞句の性質に起因するものである。つまり、(22)～(24)のように、NP1とNP2が「音声」としてしか解釈されない場合の両者は独立した二つの値として存在し、一方に対して属性を認めたり、定義したりすることはできない。そのため、両者はもっとも単純なレベルの「同一性」の関係として解釈される。一方、(19)～(21)での名詞句の関係は単なる「同一性」を超えた多様な意味関係が想定可能である。

上記のように、同じ動詞であっても異なるタイプの名詞句を受けられることができるという

⁹実例を観察してみると、「彼を英雄と思っている人はいまだに多い」のような文や「私はあの老人を不審者と思っていた」のように、「NP1ヲNP2トV」型においても「値—値」ではなく、「対象(値)—属性(役割)」のような解釈が可能な場合が存在する。この場合、本稿で扱っているような構文とは異なる、「ダ」が脱落した文である可能性がある。このような仮説を検証するためには、本来「ダ」が存在しない文と「ダ」が脱落した文をどのように区別するかという問題を明らかにしなければならないが、この点については今後の課題としたい。

現象は、これらの動詞が、二つの意味機能を持っているからだと思われる。「聞く¹⁰、言う、答える、伝える、報告する」のような動詞はモノとしての言葉を再現する機能と、内容を持つコトとしての言葉を伝える機能の二つの側面を持っており、どういう名詞句を取るかによって顕在する機能が異なる。つまり、(19)～(21)のように「役割」と「値」を両方表せる名詞句と共起する時には、内容を持つコトとしての言葉を伝える機能をしており、(22)～(24)のようにモノとしての音声と共起する際には、単に音声を再現する機能をしているのである。このように、名詞の性質によって「NP1ヲ NP2ト V」型をとるか「NP1ヲ NP2ダト V」型をとるかが分かれる現象は、この二つの構文が異なるタイプの構文であるという主張の裏づけにもなると思われる。

5.3 「値」として解釈され難い名詞句

澤田(2003)は、属性を叙述する名詞述語文は、〈部類〉、〈側面〉、〈部分〉の3層からなる「属性の階層構造」を想定することが可能であり、名詞述語文は〈部類〉をプロトタイプとした構文であると述べた。また、澤田(2003)は、日本語の名詞述語文は基本的に〈部類〉、〈側面〉を表すことができるとしている。以下で、〈部類〉と〈側面〉に関する澤田(2003)の説明を次のようにまとめる¹¹。

〈部類〉：「 $X \subseteq Y$ 」の関係にある文。

(25) 彼は幹事だ。

- a.(幹事が複数名で構成される場合)「 $X \subset Y$ 」
- b.(幹事が一名の場合)「 $X = Y$ 」

〈側面〉：「 X は[$Z + [Y]$]だ」において「 X の Y 」とすることが可能で、「太郎の性格」、「今日の天気」といったように、 Y が主題 X に対し、属性叙述の何らかの基準となる項目を表しているもの。

(26) a.川田くんはすなおで朗らかな性格です。

- b.あの力士は立派な体つきだ。
- c.今日はいい天気だ。

¹⁰「聞く」の場合、「言う、答える、伝える、報告する」とは性質が異なるが、伝達・発話内容の着点という観点からすると、「聞く」もこれらの動詞と同類のものとみなすことができる。

¹¹澤田(2003)は〈部分〉についても次のように説明しているが、一般的にこのタイプのものは名詞述語文として成立しないため、本稿では取り上げない。

〈部分〉：「 X は[$Z + [Y]$]だ」において X と Y の間に論理的な関係が成立せず、また、[$Z + [Y]$]全体でも主題 X が属する集合を表しているとは捉えにくいもので、〈部類〉の属性叙述としては成立しないもの。例：??彼は高い背だ／??彼は大きな手だ／??彼は青色のセーターだ。

ここで、(25)と(26)を本稿で扱う構文に適用してみると、「NP1ヲNP2ダトV」型の場合は自然だが、「NP1ヲNP2トV」型にすると許容度がやや落ちる現象が見られる。さらに、<部類>を表す名詞述語文より、<側面>を表す名詞述語文のほうがより許容度が落ちるように思える。

(27) a. 皆は彼を幹事だと思っている。

b.(?)皆は彼を幹事と思っている。

(28) a. 先生は川田くんをすなおで朗らかな性格だと思っている。

b. ??先生は川田くんをすなおで朗らかな性格と思っている。

(29) a. 私はあの力士を立派な体つきだと思っている。

b. ??私はあの力士を立派な体つきと思っている。

(30) a. 太郎は今日をいい天気だと思っている。

b. ??太郎は今日をいい天気と思っている。

(27)のNP2は<部類>を表しており、<部類>を表す名詞述語文は「NP1=NP2」の場合も可能であるため、属性を表すとしても「値」として解釈される場合が混在している。しかし、(28)~(30)の場合は、NP2がNP1の側面を表しているため、「NP1=NP2」の関係にはなれないタイプであり、従って、NP2は「値」として解釈され難い。すなわち、属性を叙述するNP2の中でも、<側面>を表す名詞は基本的に「値」として解釈され難いため、「NP1ヲNP2トV」型に生起すると許容度が下がるのだと思われる。

6. 副詞との共起現象

本節では、(ii)タイプの動詞が生起した文について「NP1ヲNP2ダトV」型と「NP1ヲNP2トV」型の副詞との共起現象の相違について考察する。まず、前節までの観察に基づいて考えると、「NP1ヲNP2トV」型は仮説として次の二つが想定される。一つ目は「NP1ヲNP2トV」型は本来「ダ」が存在しないと考える立場で、二つ目は「NP1ヲNP2ダトV」型から「ダ」が脱落したものと見なす立場である。本章では副詞との共起現象を根拠に、前者の仮説が妥当であることを主張する。

6.1 程度副詞との共起現象

(31) 花子は美人らしいかもしれない。

(31)は、モダリティ要素の影響により「ダ」が脱落した構文である。(31)が元々「ダ」が存在していない文ではなく、「ダ」が脱落した文であることは次のように「ダ」の異形であ

る「である」や過去形である「だった」が生起可能なことから根拠付けられる。

- (32) 花子は美人であるらしいかもしれない。
(33) 花子は美人だったらしいかもしれない。

しかし、(34)の「NP1ヲ NP2トV」構文は(27)のような「ダ」の脱落の現象ではないように思える。

- (34) 先生は花子を美人と思っている。

(34)が(32)とは異なり、「ダ」が脱落した文ではないということは、次の(35)と(36a)には「すごく」が挿入可能であるのに対し、(36b)にはそれが不可能なことから説明できる。

- (35) 花子はすごく美人らしいかもしれない。
(36) a. 先生は花子をすごく美人だと思っている。
b. ??先生は花子をすごく美人と思っている。

この現象は、「ダ」を伴って程度性を持つ名詞句が「NP2ト」では程度性を持たないということの意味し、これはまた「NP2」が述語として働いていないことに繋がる。このような現象から「NP1を NP2トV」型は「NP1を NP2ダトV」型から「ダ」が脱落した構文ではないことが言えると思われる。

6.2 文副詞との共起現象：単一の場

(37)の例を見ると、「NP1ヲ NP2トV」型は「NP1ヲ NP2ダトV」型とは異なり「単一の場¹²⁾」を構成していることがわかる。

- (37) a. 洋子はお見合いの相手をきっとハンサムな人だと予想している。
b. 洋子はお見合いの相手をきっとハンサムな人と予想している。

(37a)は「洋子が相手をきっとハンサムな人だと予想している」という解釈と、「洋子が相手をハンサムな人だと予想している」ことに対して発話者の方が「きっと」という信念を抱いているという解釈が両方可能である。すなわち、「きっと」は「洋子」の信念世界に属しているとも「発話者」の信念世界に属しているとも解釈できる。一方、(37b)にはこのような解釈の曖昧性は存在せず、「きっと」は話者の信念に属しているものとしか解釈できない。

¹²⁾ 「場」という概念は砂川(1988)に基づいている。詳しくは砂川(1988)を参照されたい。

「きっと」は文副詞であり、本来ならば、「話者」の観点から述べられるはずだが、(37a)で主体「洋子」に属するものとしても解釈可能であることから、(37a)は二重の場を持つが、(37b)はそうではない。また、(37a)と(37b)の解釈に違いが生じることは、(37b)の文が(37a)から「ダ」が脱落したものではないという裏づけにもなると考えられる。

7. まとめ

本稿では、「NP1ヲNP2トV」型と「NP1ヲNP2ダトV」型の名詞句解釈に見られる制限や、副詞共起制限現象を取り上げ、前者の構文は後者の構文から「ダ」が脱落した構文ではなく、本来「ダ」が存在しない構文であることを主張した。

その意味的な根拠である名詞句解釈の制限とは、「NP1ヲNP2トV」型の名詞句は「値—値」としての解釈は可能だが、「役割—値」のように解釈され難いということであり、これと関連して、NP2に「値」として解釈され難い名詞が生起する場合には「ダ」が必要とされる現象についても指摘した。

また、文法的な根拠としては、「NP1ヲNP2トV」型は「NP1ヲNP2ダトV」型と異なり、程度副詞と文副詞が挿入できない現象について考察した。

以上のことから「NP1ヲNP2トV」型は、本来「ダ」が存在しない構文であり、意味構造においても、「NP1ヲNP2トV」型は「NP1ヲNP2ダトV」型より解釈の幅が限られることがわかった。

本稿で指摘した「NP1ヲNP2トV」型と「NP1ヲNP2ダトV」型の意味的・文法的な違いは、これらの構文に生起している「ト」の意味機能に起因している可能性が疑われる。すなわち、「値—値」の解釈がされる「NP1ヲNP2トV」型の「ト」はNP1とNP2を同一化する「同一性」を表す形式として機能しており、「NP1ヲNP2ダトV」型の「ト」は様々な意味の主—述関係にある文を受けることができる「引用」の形式として機能している可能性があるということである。このような仮説を検証するためには、更なる考察が必要だが、今後の課題としたい。まだ検証しなければならないことは残っているが、本稿で指摘した現象は「NP1ヲNP2トV」型を正しく位置づけるための一つの手がかりになると思われる。

【参考文献】

- 阿部二郎 (2001) 「「AをBダト思ウ」と「AヲBト思ウ」」『日本語と日本文学』34, pp.14-24、筑波大学。
- 阿部二郎 (2004) 『現代日本語における引用句の諸相：引用句内の構造を中心に』筑波大学博士(言語学)学位論文。
- 今田水穂 (2009) 『日本語名詞述語文の意味論的・機能論的分析』筑波大学博士(言語学)学位論文。
- 金賢娥 (2011) 「「AヲBトV」構文に関する一考察」『筑波応用言語学研究』18, pp.63-77 筑波大学文芸・言語専攻応用言語学研究室。

- 小泉保 (他) (編) (2004) 『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店.
- 澤田浩子(2003) 「属性叙述における名詞述語文」『日本語教育』116、pp.39-48
- 新屋映子 (2009) 「形容詞述語と名詞述語 - その近くて遠い関係」『国文学 解釈と鑑賞』74、pp.31-40, 至文堂.
- 砂川有里子 (1988) 「引用文における場の二重性について」『日本語学』7 - 9、pp.14-2、明治書院.
- ジル・フォコニエ、坂原茂 [他] 共訳 (1996) 『メンタル・スペース : 自然言語理解の認知インターフェイス』白水社.
- 藤田保幸 (2000) 『国語引用構文の研究』和泉書院.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』明治書院.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 - 指示的名詞句と非指示的名詞句 - 』ひつじ書房.
- 西山佑司・佐々木文彦(2011) 「意味機能から見た名詞の分類」『明海大学大学院応用言語学研究』13、pp.129-142